

# 立命館大学建設会

発行所  
立命館大学建設会事務局  
〒525-8577  
滋賀県草津市野路東1-1-1  
立命館大学理工学部  
環境都市系事務室内  
平成 25 年 8 月

## 第27号

### 会長挨拶

建設会会長

中尾 恵昭

昭和五十年卒



昨春秋、建設会会長に就任しました中尾です。よろしくお祈いします。

建設会会員の皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

会長就任以来各支部の総会に参加し、それぞれの幹事の皆様が熱心に支部の活動を支え活性化に努めておられる様子を拝見しました。

特に各支部同様に参加者の拡大と若い世代の参加者拡充のため様々な取り組みがなされており、その姿勢に敬意を表する次第です。

この春には環境都市系の卒業記念パーティに招かれ、若い後輩たち

北の人たちのひたむきで真摯な心情、姿が垣間見え、元気をいただいた感がありました。

近年、列島は東北の大震災を初め、記憶に新しいところでは紀伊半島の台風、九州北部豪雨など自然の脅威にさらされており、土木技術者としては心を痛めながらも大きな関心を抱かざるを得ません。

一旦災害が起これば行政、建設業者を初めとする土木技術者がいち早く現場に入り、道路・港湾を啓き、河川を修復することに責務を感じ、事業を遂行してきました。

それは目立たない仕事ですが、もとより土木は元々脆弱な日本の国土を保全するため、黙々と着実に仕事をすることを志・使命を遂げ、それで達成感を得てきたものと思います。

それとともに自然を畏れ、崇め、それを活かして一体化して、謙虚に自然の摂理に合ったものづくりをしてきました。それが土木の仕事

であって、決して自然と対峙してそれを克服してきたものではないはずで、それがいつの間にか不遜にも自然を征服するかのごとく技術で抑え込んできたと思いつつ、元来、自然は時には脅威となりつつも、それとともに人類にとつて限りない恵みを与えてきたものであり、先に述べたように土木はそれと一体となり、むしろ先人たちは自然を取り込み活用し、永きに亘り幾度かの課題を解決し困難を乗り越えて、営々と生活基盤を築きあげ社会を支えてきました。

今こそ建設技術者は震災の復興・復興やこれからの起りえる東南海、南海地震などの災害に対し、思考停止にならず技術者間や他職種・分野と情報を共有するとともに連携を図る。核となり、各々

のほこびとなりましたが、今後も特任教授として引き続きご指導を賜ることとなっております。小林先生におかれましては、自然風などを活用した室内環境制御による快適で省エネルギーな建築環境を目指したご研究とともに、学系の運営にも積極的に取り組んでこられました。現在は大阪市立大学の工学研究科都市系専攻(建築学)に赴任され、新しい環境での活躍を開始されておられます。お二人の先生方も、これまで学系のために多大なご尽力をされてこられました。この場をお借りいたしました。心よりの感謝の意を申し上げます。

一方、新任の先生方につきましては、今年度より職名の異動を含め八名の方々をお迎えすることができました。都市システム工学科では、交通工学分野の安隆浩・特任助教(旧助手枠より異動)と、水工水理学分野のPHAN NGOC MY TUY・助手の二名が、環境システム工学科には、建設保全分野の石森洋行・講

師、内田慎哉・講師、横山隆明・特任助教と、環境システム分野の吉川直樹・特任助教(旧助手枠より異動)の四名が、建築都市デザイン学科では、建築史分野の青柳憲昌・講師と設計計画分野の藤井健史・助手(旧助手枠より新助手枠へ異動)の二名が、パワー溢れるメンバーとしてご着任いただいております。現在、三学科ともに次年度へ向けた新たな人事も予定されており、ますます充実した教育・研究体制となることを期待されております。

さて、今年度の我々学系の一大イベントとしては、新棟の建設とそこへの移転がございます。ご承知のように私たちの学系三学科は、広大なびわこ・くさつキャンパスの中でこれまで別々の建物に分散して配置されてきましたが、このような環境にも係わらず、他大学には見られない、土木、環境、建築分野が深い絆で結ばれた、融合的な教育・研究活動を継続してきております。これもひとえに教職員

の諸先輩方と、卒業生、在校生の皆様方が「環境都市学系の文化」

を時間をかけて醸成し、維持してこられたご尽力の賜と存じております。この土壌があったからこそ、分野融合の様々な共同研究プロジェクトも採択され続けてきたのではないかと思います。この強力な布陣が、今年度末にはいよいよ活動拠点としても一つとなり、新しい建物に移ることになります。

が営々と培ってきた想像力を持つてその(最適)解を賢く描き、着実に施策を推し進めていく。エンジン」にならなければならぬと考えます。

来年、理工学部が衣笠からびわこ・くさつキャンパス(BKC)に拡充移転して二十周年という節目を迎えます。現在、理工学部では「BKC移転二十周年記念事業」が展開されており、教育環境の充実および新たな人材育成プロジェクトの導入に向けた検討がなされています。建設会としても後輩たちの学習環境向上のため、学校・他学系とも連携した取り組みを行いたいと考えております。

会員の皆様方におかれましては、建設会活動について今後ますますのご支援ご協力をお願い致しまして、挨拶と致します。

を時間をかけて醸成し、維持してこられたご尽力の賜と存じております。この土壌があったからこそ、分野融合の様々な共同研究プロジェクトも採択され続けてきたのではないかと思います。この強力な布陣が、今年度末にはいよいよ活動拠点としても一つとなり、新しい建物に移ることになります。

現在目下建設中の新棟は、コア・ステーション北側にあった駐輪場跡地を敷地として、三階建ての中層棟と五十一階建ての高層棟とが連結された形式となり、同時に最先端の環境配慮技術を集約したグリーン・ビルディングとなる予定です。計画・設計には学系から多くの先生方が直接・間接に参画されており、分野融合の教育・研究をさらに推進していくことのできる環境が整います。建設会の皆様方におかれましては、私たちが学系のこれからの活動にぜひご期待いただき、変わらぬご支援とご鞭撻を賜りましたら幸いです。

今後とも何卒宜しくお祈いを申し上げます。

を時間かけて醸成し、維持してこられたご尽力の賜と存じております。この土壌があったからこそ、分野融合の様々な共同研究プロジェクトも採択され続けてきたのではないかと思います。この強力な布陣が、今年度末にはいよいよ活動拠点としても一つとなり、新しい建物に移ることになります。

現在目下建設中の新棟は、コア・ステーション北側にあった駐輪場跡地を敷地として、三階建ての中層棟と五十一階建ての高層棟とが連結された形式となり、同時に最先端の環境配慮技術を集約したグリーン・ビルディングとなる予定です。計画・設計には学系から多くの先生方が直接・間接に参画されており、分野融合の教育・研究をさらに推進していくことのできる環境が整います。建設会の皆様方におかれましては、私たちが学系のこれからの活動にぜひご期待いただき、変わらぬご支援とご鞭撻を賜りましたら幸いです。

### 分野共同のプロジェクトを加速する新棟移転への期待

環境都市学系 学系長

都市システム工学科

大窪 健之



会員の皆様方におかれましては、益々ご清祥のこととお喜びを申し上げます。

私は今年度の学系長を拝命いたしております。都市システム工学科の大窪と申します。立命館大学に着任させていただいてから五年間、文部科学省から選ばれ、世界に通用する人材育成と研究活動を使命とする、立命館大学グローバルCOEプログラム「歴史都市を守る「文化遺産防災学」推進拠点」の拠点リーダーを拝命させていただいており、その間、学系の皆様方のご配慮により学内の業務負担を軽減していただいております。

この度、昨年度末のプログラム終了をもって、無事に拠点リーダーを卒業させていただきましたので、その恩返し

の気持ちと、少しでも

学系のお役に立ちたい気持ちから、恐れ多くも本重職を担当させていただきますこととなりました。学系運営について慣れない未熟者ではございますが、学系発展の足を引っ張ることのないよう、勉強させていただきますながら精進して参りたい所存ですので、建設会の皆様方におかれましては、どうかご指導を賜りましたら幸いです。

まず、教員の異動についてご報告を申し上げます。昨年度末をもちまして学系を離れた先生として、建築都市デザイン学科の山崎正史・教授、小林知広・講師がおられます。山崎先生におかれましては、建築史と景観保全を中心とした分野で積極的な教育・研究活動に取り組んでこられました。このたびご定年を迎えられご退職

を時間かけて醸成し、維持してこられたご尽力の賜と存じております。この土壌があったからこそ、分野融合の様々な共同研究プロジェクトも採択され続けてきたのではないかと思います。この強力な布陣が、今年度末にはいよいよ活動拠点としても一つとなり、新しい建物に移ることになります。

現在目下建設中の新棟は、コア・ステーション北側にあった駐輪場跡地を敷地として、三階建ての中層棟と五十一階建ての高層棟とが連結された形式となり、同時に最先端の環境配慮技術を集約したグリーン・ビルディングとなる予定です。計画・設計には学系から多くの先生方が直接・間接に参画されており、分野融合の教育・研究をさらに推進していくことのできる環境が整います。建設会の皆様方におかれましては、私たちが学系のこれからの活動にぜひご期待いただき、変わらぬご支援とご鞭撻を賜りましたら幸いです。

今後とも何卒宜しくお祈いを申し上げます。



# 会員の声

## 岐阜県建設会とともに



岐阜県建設会副会長  
福山益生  
昭和四十二年卒

平成十九年十月に発足した岐阜県建設会も、設立以来、今年で、七年目を迎えるようになっています。その間、野村元会長、川嶋前会長、部田会長のもとで、新入会員への勧誘に努め、徐々にではありますが、会員数が、増えてきて、現在では、会員が二百五十名(当初百八十名で発足)となっております。

発足当初は、会員相互間の懇親を図ることを重点に、色々な行事をおこなってきましたが、岐阜県建設会が、発足してから、六年目の平成二十四年度に、初めて、自主事業として、「中山道鶴沼宿での見学会と講演会」を行いました。

平成二十五年度は、現場研修というところで、五月に、「美濃市のまちづくり」と「中部電力の水力発電所」等について、現地を訪問し、現場研修をしたところであります。

現在のところは、岐阜県建設会の研修内容については、少しでも多くの会員の皆さんに、参加していただければ、がんばっているところでありたい。ところで、景気もすこしづつは、よい方向に向かっており、建設業界も、明るい話題が、だんだん、増えてきているように思います。



平成24年度 立命館大学岐阜県建設会 総会

安心安全な社会を、作るかという観点からの事業が、かなり多かったように思います。しかし、最近では、より豊かな社会を作るためには、どのような、すべがいかに、という観点での事業が、求められているように思います。

災害などについても、これまでの台風、豪雨、豪雪などに加え、新たに、地震、津波、そして原子力等が大きくクローズアップされるようになってきています。これからは、安心安全な社会を、作っていくために、今以上に、より高度な社会基盤の整備が、一層求められていく時代ではないかと思えます。

また、日本の建設業も、これからは、国内に限らず、海外での活躍が、ますます必要になってくると思えます。

私も、立命館大学建設会岐阜県支部の一員として、これからも、がんばっていきたくと考えております。最後になりましたが、立命館大学建設会の益々の発展と、会員の皆様方のご健康とご多幸を、お祈り申し上げます。

## 京都支部の近況



京都支部支部長  
井上房雄  
昭和四十四年卒

全国の建設会の皆様にはいかがが過ぎでしょうか。

長い間公共事業費も右肩下がりが続いて建設業界も厳しい時代でありましたが、昨年末の政権交代もあり少しは明るい兆しが出てきていると言われているようですが、皆様にとってはいかががでしょうか。

さて、京都支部は隔年で総会を開催されることとされており前回は平成二十三年十月二十二日(土)に会員百余名の参加を得て開催されました。その時の総会で図らずも会員皆様の賛同を頂き、支部長に就任いたしました。

それから二年近くなりましたが十分な活動は出来ておりませんがその間の取り組みや感じたことをしたためたいと思います。昨年十月には京都で本部建設会総会が開催されることとなり、地元支部として総会の盛会に向けて全力で取り組みをいたしました。おかげをもちまして支部会員も多数参加して頂き総会の盛会に寄与できたのではないかと考えております。

又、いくつかの各府県の建設会(支部)総会にお招きいただき感謝を申し上げるとともに、各建設会(支部)とも多くの会員の参加に向けて総会の進め方に関する工夫がなされていることが大変印象深く残っております。それとやはり財政課題についてどこも苦慮されているように感じるところも同じような課題があることをあらためて感じたところです。

そして、今年も支部総会を開催する年になっておりまして現在十月開催に向けて準備をしているところであります。出来るだけ皆さんの会員に参加して頂けるよう役員会で協議をしております。やはり支部発展のためには参加者の人数はもちろんですが幅広い年代の方々の参加と若い人も多く参加できるように総会にしてゆきたいと考えております。そうなれば世代間の交流も深まってゆ

## あ、それは法則です



建立会  
楠本 博  
昭和五十四年卒

きお互い何かプラスになるものを得られるような場になってゆけばさらに交流が深まり支部発展に繋がっていきと思っております。

最後になりますが、大学を卒業してから四十四年経ち私も昨年からは高年齢者の仲間入りとなりましたが卒業就職当時は高度経済成長期で建設業界も活気にあふれておりました。もう当時のようなことは無いでしょうがこれからも建設業界が若者たちにとって将来を託せる魅力ある職場であることを願っております。

私の好きなミュージシャンは、なんとと言ってもエルビスです。マイケルも大好きです。ダイアナ・ロスとホイットニー・ヒューストンもお気に入りです。ホイットニーが昨年、亡くなったニュースがスマホの号外に飛び込んだときは、忘れられない二月の土曜日でした。私は趣味の写真撮影で京都市内を歩いていた時で、また一つの時代が終わったんだという悲しい気持ちで一杯になりました。それにしても、エルビス四十二歳、マイケル五十歳、ホイットニー四十八歳って！こまでは余談でした。

の英語の先生は、Mr. Shawn Tsujii: 立命館大学を出て、英国の大学院で社会人類学を終了(MA)した人です。私より大分若いので後輩にはなるのですが、とても見識の高い人です。彼によると、その法則は「The law of attractions」と言うそうです。私はすでに、私の周りで起こっていることに気づいていたので、同じ立命館と知らずに出会った二人の出会いも、それなんだ、と驚いたものでした。俺が俺がと言うよりも、Thank you for your kindness! と言って生きて行きたい。若い人は年配の人とも付き合ってください。また、年配になったら若い友達を作りましょう！自分より先に逝かれると悲しいから。あつ、最後まで余談でした。何かこんなコラムでいいのでしょうか？

## 衣笠は遠くに成りにけり



滋賀建設会副会長  
石田良明  
昭和五十五年卒

ホント、自宅通学の私にとって、衣笠学舎までは遠かった。まだ、市電が通っていたころで、京都駅から西大路通りの平野神社まで一時間かかったこともあった。そこからまた、教室まで十五分ほどの徒歩。トホホであった。でも、思い出せば私の青春の一部であり、いい友とも多く出会えた。

さて、今年も滋賀建設会の総会・懇親会(今年七月二十六日・琵琶湖ホテルで開催)の準備時期になり、会員名簿をチェック。私が生まれる前の昭和二十三年卒の大々先輩から今年三月卒業の新会員(加入の意思は問わず!)まで総勢約二百四十名。担当の県職員(約五十名)の名簿を作成してビックリ!。なんと、私を含めて、昭和卒は僅かに七名のみ。衣笠卒でも九名のみ。既に大半の会員は衣笠を知らない世代(BKC卒)に変わっていました。後輩と飲みに行つて、私の卒業年次に生まれましかたと聞くとちよつとショック。これもトホホ。

昨年の総会で、昭和四十三年制定以来、四十四年経って来た、滋賀衣笠会の名簿を衣笠を知らない世代に一人でも多く参加してもらえないようにと、私的には長年慣れ親しんだ、衣笠会の名簿を残したかったのですが、先輩たちの同意も得て、滋賀建設会に改称しました。

当然、会の名称を改めただけで、多くの会員が総会・懇親会に参加してもらえないとは思いません。会長を始め役員が汗を流して、より多くの会員に参加してもらえよう、日頃からの努力が必要なのは言うまでもありません。

時々、会員から、総会・懇親会に出席して何のメリットがあるのですか?との質問(私にとっては愚問!)を受けます。特に、今時の若い世代からは、私が「衣笠会」に参加し始めた頃は、勤務先の土木事務所長が先輩であったこともあり、「行くぞ」と言われれば、「はい」と、何も考えず参加したものです。今の若い世代の人には、「参加する理由」、「メリット」が必要なのではないか?人間関係を構築するのが嫌?煩わしい?これもトホホ。

総会とは何か(失礼)、懇親会とは何か大事!これが私の経験。日本人だけでしょ?お酒を飲み交わすと人間関係の距離がすぐ近くなるのは?特に同じ大学の先輩後輩。既に共通の話題がある訳です。仕事を進める上で、「この間はどうも」で話が進めやすい。仕事上の悩み事。アドバイスを受けやすい。職階を超えて気楽に話が出来ると。時には先輩に悪態もつける(先輩の皆さんご免なさい)。これってメリットでしょ。何だか大学の話から懇親会の話にシフトしてしまっているようですが(反省)。

会の名称から「衣笠」は無くなりませんが、巨人の長嶋ではありませんが、私の青春のページであります。「衣笠」は永遠です。衣笠でなくとも、同じ大学で同じ志で学んだ後輩諸君、会長を始め役員一丸となつて魅力ある滋賀建設会作り心掛けますので、是非一度、建設会の総会・懇親会に参加していただくようお願いいたします。決して損はさせません!参加は、今でしょ!!



# 山椒は小粒でも ぴりりと辛い



建立会  
田中美帆  
平成二十一年卒

私は都市システム工学科を卒業後、建設コンサルタントで港湾構造物の設計に携わっております。社会人五年目となる今でも、建立会の皆様との交流、研究室のOB会、職場内外での卒業生同士の繋がりが等、立命館大学を通じて知り合えた方々にいつもお世話になっており、感謝の日々です。

そのつながりの中で、卒業大学の「カラー」を感じることがあります。気質の似た人が同じ大学に集まるのか、あるいは大学生活の中でカラーに染まるのでしょうか。私の身近な立命館大学卒業生は、気が強く、負けず嫌い、ちょっと一癖ある、そんな魅力を持つ方が多い気がします。かく言う私もその一人と自負しております。

私は設計者として社会基盤整備に携わり、大きな充実感を得る一方で、やはり業界の厳しさも感じております。これからは、技術者ひとりひとりの「持ち味」が大切になってくるのではないかと考えます。私は、ぴりりと辛い山椒のようなスパイスを隠し持ちたい、などと自惚れております。

今年、私は技術士試験の初受験を控え、立命館大学技術士会の皆様に大変ご丁寧な指導をいただいております。持ち前の負けん気を発揮するチャンス到来です。

# 立命館大学との 縁を振り返って



理工学部  
特別任用教授  
山崎正史

今年二〇一三年三月、立命館大学理工学部建築都市デザイン学科教授を退職しました。ちょうど二十年勤務し、助教授五年間、教授を十五年

勤めました。これまで教授在職期間二十年以上が名誉教授の条件であったのが、今年からその期間が十五年以上に改正され、おかげさまでその適用最初の年に名誉教授にさせていただきました。

どなたも定年を迎える時が来ると、人生の過ぎる早さを思われることでしょうか。思い返せば、それ以前から私は立命館と縁があったように思われます。その縁にまつわる話を、立命館大学の過去のエピソードの紹介でもあろうかと、紹介させていただきます。

私は京都の、送り火で知られる大文字山の真下で生まれ育ちましたが、同じ町内に立命館大学の梅原猛先生が住んでおられました。一九七二年に『隠された十字架』という、聖徳太子と法隆寺の関係を書いた書を出版され、当時は相当なセンセーションを巻き起こし、それから大変有名になられました。高校の時に先生の『地獄の思想』という本を読んで感動したのを憶えています。どちらの書もベストセラーになったと記憶しています。私の小学校（左京区にある第三錦林小学校）の父兄会会長をされ、母がその年の会計担当で、先生のお名前が家庭でもよく出、親しく感じたものでした。同じ小学校で、日本史研究の第一人者として著名であった林家辰三郎先生、また経済学部教授であった武藤清先生（お二方も立命館大学）のお嬢様方と同じクラスで、特に林家先生のお宅にはよく遊びに行きました。琵琶湖疏水哲学の小径に近い、地名も鹿ヶ谷と風流な土地の瀟洒なお宅でした。先生にも何度かお目にかかりました。商品の良い、優しい方でした。お嬢様方は愛らしく、クラスの人気者でした。

私は京都府立鴨沂（おうき）高等学校の卒業ですが、御所の東隣、平安時代の関白藤原道長邸の跡地にあります。そのほど近い北側に、立命館大学小路キャンパスがあります。理工系は今の衣笠キャンパスでしたが、文社系は鴨川と御所の間に位置する町なか大学でした。その中央あたりに学生会館があって、私たちが高校生も少し「贅沢な気分」でその学生食堂にしばしば食事に行った

ものです。同志社はお金持ちのほんほんやお嬢様方のお洒落な大学、立命館はあまり女子学生のいないパンカラ大学生の大学、というイメージの時代です。実際、学生さんたちは両大学で見るからに違った印象でした。

「青年よ、未来に生きよ」という銘文とともにあった末川博先生の銅像が今でも目に焼きついてます。太平洋戦争終戦後、日本では民主化の大きな波が巻き起こり、その頃、日本を大統領制にすべしという考えもかなりあったそうで、そういう人たちの間で、大統領を選ぶなら立命館の末川博教授を、という声が大きかったと聞きます。それほど、立命館は自由と民主制を切り開く先鋒として知られ、末川博先生は広く尊敬を集めた方なのでした。一九三三年、日本が軍国主義に走り、いよいよ戦争に突入しつづけた時期、京都大学の法学部滝川教授の教育内容を政府が批判し、免職を迫ったことがあり、それに抗議して京大法学部教授六名が辞職したのが「滝川事件」です。

末川先生はその辞職された六教授の一人で、その時に立命館大学へ移られた後に総長になりました。衣笠キャンパスには今も銅像があり、末川記念館があります。私は学生の頃、吉田山の散歩が好きで黄昏時によく歩いたのですが、金戒光明寺（俗称、黒谷さん）あたりで着物姿で散歩しておられた末川先生を時々お見かけしました。若い頃の写像を見ると、肉付きもよく精悍で鋭い印象ですが、私がお見受けした頃は細身で温厚な顔つき、和服を風流に着こなされ、山門の下に佇んでおられました。ご自宅が金戒光明寺のすぐ側で、ご息も立命館大学の史学の教授を勤められました。またそのご子息（末川博先生のお孫さん）末川協さんは、私が京都大学工学部助手の時に、私と同じ研究室にいられて卒業研究をされ、親しくしておりました。歴史の町並み保存研究に日本で先導的に取り組んでいた研究室でした。

四十才代にはいって、「建築都市意匠研究所」を立ち上げました。かねて、都市形成と建築の関係が課題であると思っていたことと、建築設計にもまだ意欲があったからです。京大卒業後、大阪梅田の浦辺建築設計事務所（現浦辺設計）と川崎清京都大学教授が主宰しておられた環境・建築研究所で短期間、設計にも携わったことがあります。川崎清先生は万博美術館を設計された方で、そこで斬新なサッシュレスのガラス壁面を世界最初にデザインされたのでした。浦辺設計は倉敷の町並み保存や、アイビースクエアの設計をした事務所です。私の研究所では地方行政から幾つか委託をいただいていたので、京都市の風致保全計画では、規制を種別ランキングによるのではなく、地区景観の個性に合わせた地区別基準を提案し、当時は内部指導基準として採用されましたが、今はその考え方が美観地区にも風致地区にも採用されています。京都市の現在の景観制度より一世代前の京都市市街地景観整備条例の原案作りにも参加しました。市の担当者と一緒に、私を含めコンサル・大学教員四名で案を考えたのですが、その制度形態が国の現在の景観法に取り入れられていきます。他に祇園新橋伝統的建造物群保存地区見直し調査、名古屋有松地区のデザインガイドライン、兵庫県大規模建築物等指導基準の作成、それに平安建都千二百年事業の「文遊回廊」の企画などの仕事をさせて頂き、充実した時期でもありました。文遊回廊事業では、当時はまだ殆ど認知されていなかった町家の価値を広く理解してもらった機会にしようと考え、二十数軒のお宅に足を運んで公開を頼み、市民が町家を訪ねるといふ事業を実施しました。京町家の内部が市民に公開された最初であったと思います。かなり大きな反響がありました。

そうした折、立命館大学で環境システム工学科を創設し、それに環境デザイン分野を新たに入れるため教員公募がありました。これに応募し幸運にも採用していただきました。主査は山田淳先生で、新学科設立の中心というか殆どお一人で活動されているような感じでした。家族で立命館大学と山田先生のお宅の方向には足を向けて寝られないと言って暮らしてきたものです。一年間だけ衣笠キャンパスの土木工学科に所属し

設計にもまだ意欲があったからです。京大卒業後、大阪梅田の浦辺建築設計事務所（現浦辺設計）と川崎清京都大学教授が主宰しておられた環境・建築研究所で短期間、設計にも携わったことがあります。川崎清先生は万博美術館を設計された方で、そこで斬新なサッシュレスのガラス壁面を世界最初にデザインされたのでした。浦辺設計は倉敷の町並み保存や、アイビースクエアの設計をした事務所です。私の研究所では地方行政から幾つか委託をいただいていたので、京都市の風致保全計画では、規制を種別ランキングによるのではなく、地区景観の個性に合わせた地区別基準を提案し、当時は内部指導基準として採用されましたが、今はその考え方が美観地区にも風致地区にも採用されています。京都市の現在の景観制度より一世代前の京都市市街地景観整備条例の原案作りにも参加しました。市の担当者と一緒に、私を含めコンサル・大学教員四名で案を考えたのですが、その制度形態が国の現在の景観法に取り入れられていきます。他に祇園新橋伝統的建造物群保存地区見直し調査、名古屋有松地区のデザインガイドライン、兵庫県大規模建築物等指導基準の作成、それに平安建都千二百年事業の「文遊回廊」の企画などの仕事をさせて頂き、充実した時期でもありました。文遊回廊事業では、当時はまだ殆ど認知されていなかった町家の価値を広く理解してもらった機会にしようと考え、二十数軒のお宅に足を運んで公開を頼み、市民が町家を訪ねるといふ事業を実施しました。京町家の内部が市民に公開された最初であったと思います。かなり大きな反響がありました。

環境システム工学科では学科構成の三分の一を環境デザインにあてていました。先述の川崎清先生が学科設立に協力され、京大退職後、同学科教授に着任されました。三宅先生と平尾先生が相次いで着任され、一緒に環境デザイン分野を担当しました。校舎も新しく、オフィスビルほどの綺麗さで、優秀な学生さん達に研究室に入ってもらえ、楽しく仕事をさせていたいただいたものでした。やがて、学科の中で建築や環境デザインを学びたいという学生の割合が増え、環境デザイン分野を独立させようということになりました。当時、理工学部長をしておられた児島先生（土木工学科）が建築が大好きで学科設立を推進していただきました。科目構成や教員構成など、私と平尾先生、八木先生（三宅先生の後任、現在は関西学院大学教授）の三人で学科のおよその形を考えました。当初「環境デザイン学科」という名称で考えていましたが、前倒し人事で来られた及川先生の提案で「建築都市デザイン学科」とすることになりました。奇しくも私が立ち上げた事務所名の一部を英語にした名前になりました。建築と都市デザインは二分野を教育する学科という意味もありましたが、それより、建築が集合して都市を形成する、だから都市デザインとして建築を考えた方がよくないか、京町家の内部が市民に公開された最初であったと思います。かなり大きな反響がありました。

環境システム工学科では学科構成の三分の一を環境デザインにあてていました。先述の川崎清先生が学科設立に協力され、京大退職後、同学科教授に着任されました。三宅先生と平尾先生が相次いで着任され、一緒に環境デザイン分野を担当しました。校舎も新しく、オフィスビルほどの綺麗さで、優秀な学生さん達に研究室に入ってもらえ、楽しく仕事をさせていたいただいたものでした。やがて、学科の中で建築や環境デザインを学びたいという学生の割合が増え、環境デザイン分野を独立させようということになりました。当時、理工学部長をしておられた児島先生（土木工学科）が建築が大好きで学科設立を推進していただきました。科目構成や教員構成など、私と平尾先生、八木先生（三宅先生の後任、現在は関西学院大学教授）の三人で学科のおよその形を考えました。当初「環境デザイン学科」という名称で考えていましたが、前倒し人事で来られた及川先生の提案で「建築都市デザイン学科」とすることになりました。奇しくも私が立ち上げた事務所名の一部を英語にした名前になりました。建築と都市デザインは二分野を教育する学科という意味もありましたが、それより、建築が集合して都市を形成する、だから都市デザインとして建築を考えた方がよくないか、京町家の内部が市民に公開された最初であったと思います。かなり大きな反響がありました。

環境システム工学科では学科構成の三分の一を環境デザインにあてていました。先述の川崎清先生が学科設立に協力され、京大退職後、同学科教授に着任されました。三宅先生と平尾先生が相次いで着任され、一緒に環境デザイン分野を担当しました。校舎も新しく、オフィスビルほどの綺麗さで、優秀な学生さん達に研究室に入ってもらえ、楽しく仕事をさせていたいただいたものでした。やがて、学科の中で建築や環境デザインを学びたいという学生の割合が増え、環境デザイン分野を独立させようということになりました。当時、理工学部長をしておられた児島先生（土木工学科）が建築が大好きで学科設立を推進していただきました。科目構成や教員構成など、私と平尾先生、八木先生（三宅先生の後任、現在は関西学院大学教授）の三人で学科のおよその形を考えました。当初「環境デザイン学科」という名称で考えていましたが、前倒し人事で来られた及川先生の提案で「建築都市デザイン学科」とすることになりました。奇しくも私が立ち上げた事務所名の一部を英語にした名前になりました。建築と都市デザインは二分野を教育する学科という意味もありましたが、それより、建築が集合して都市を形成する、だから都市デザインとして建築を考えた方がよくないか、京町家の内部が市民に公開された最初であったと思います。かなり大きな反響がありました。

環境システム工学科では学科構成の三分の一を環境デザインにあてていました。先述の川崎清先生が学科設立に協力され、京大退職後、同学科教授に着任されました。三宅先生と平尾先生が相次いで着任され、一緒に環境デザイン分野を担当しました。校舎も新しく、オフィスビルほどの綺麗さで、優秀な学生さん達に研究室に入ってもらえ、楽しく仕事をさせていたいただいたものでした。やがて、学科の中で建築や環境デザインを学びたいという学生の割合が増え、環境デザイン分野を独立させようということになりました。当時、理工学部長をしておられた児島先生（土木工学科）が建築が大好きで学科設立を推進していただきました。科目構成や教員構成など、私と平尾先生、八木先生（三宅先生の後任、現在は関西学院大学教授）の三人で学科のおよその形を考えました。当初「環境デザイン学科」という名称で考えていましたが、前倒し人事で来られた及川先生の提案で「建築都市デザイン学科」とすることになりました。奇しくも私が立ち上げた事務所名の一部を英語にした名前になりました。建築と都市デザインは二分野を教育する学科という意味もありましたが、それより、建築が集合して都市を形成する、だから都市デザインとして建築を考えた方がよくないか、京町家の内部が市民に公開された最初であったと思います。かなり大きな反響がありました。

思い返せば、京都大学で博士課程へ進むとき、親や知人に職につきかす一体何になるつもりかと問われ、立命館大学のような大学で働くことが出来ればと説明したことがありました。立命館には建築学科がなかったのにそう言ったのですが、縁あって、勤続中に建築都市デザイン学科創設に参加し、二十年にわたり働かせていただきました。夢は口に出すべし、と後輩に教えています。まだ数年、特任教授として教育に加えていただきます。お会いした皆様に感謝申し上げ、立命館大学と環境都市学系の今後のますますの発展をお祈り申し上げます。

環境システム工学科では学科構成の三分の一を環境デザインにあてていました。先述の川崎清先生が学科設立に協力され、京大退職後、同学科教授に着任されました。三宅先生と平尾先生が相次いで着任され、一緒に環境デザイン分野を担当しました。校舎も新しく、オフィスビルほどの綺麗さで、優秀な学生さん達に研究室に入ってもらえ、楽しく仕事をさせていたいただいたものでした。やがて、学科の中で建築や環境デザインを学びたいという学生の割合が増え、環境デザイン分野を独立させようということになりました。当時、理工学部長をしておられた児島先生（土木工学科）が建築が大好きで学科設立を推進していただきました。科目構成や教員構成など、私と平尾先生、八木先生（三宅先生の後任、現在は関西学院大学教授）の三人で学科のおよその形を考えました。当初「環境デザイン学科」という名称で考えていましたが、前倒し人事で来られた及川先生の提案で「建築都市デザイン学科」とすることになりました。奇しくも私が立ち上げた事務所名の一部を英語にした名前になりました。建築と都市デザインは二分野を教育する学科という意味もありましたが、それより、建築が集合して都市を形成する、だから都市デザインとして建築を考えた方がよくないか、京町家の内部が市民に公開された最初であったと思います。かなり大きな反響がありました。

環境システム工学科では学科構成の三分の一を環境デザインにあてていました。先述の川崎清先生が学科設立に協力され、京大退職後、同学科教授に着任されました。三宅先生と平尾先生が相次いで着任され、一緒に環境デザイン分野を担当しました。校舎も新しく、オフィスビルほどの綺麗さで、優秀な学生さん達に研究室に入ってもらえ、楽しく仕事をさせていたいただいたものでした。やがて、学科の中で建築や環境デザインを学びたいという学生の割合が増え、環境デザイン分野を独立させようということになりました。当時、理工学部長をしておられた児島先生（土木工学科）が建築が大好きで学科設立を推進していただきました。科目構成や教員構成など、私と平尾先生、八木先生（三宅先生の後任、現在は関西学院大学教授）の三人で学科のおよその形を考えました。当初「環境デザイン学科」という名称で考えていましたが、前倒し人事で来られた及川先生の提案で「建築都市デザイン学科」とすることになりました。奇しくも私が立ち上げた事務所名の一部を英語にした名前になりました。建築と都市デザインは二分野を教育する学科という意味もありましたが、それより、建築が集合して都市を形成する、だから都市デザインとして建築を考えた方がよくないか、京町家の内部が市民に公開された最初であったと思います。かなり大きな反響がありました。

環境システム工学科では学科構成の三分の一を環境デザインにあてていました。先述の川崎清先生が学科設立に協力され、京大退職後、同学科教授に着任されました。三宅先生と平尾先生が相次いで着任され、一緒に環境デザイン分野を担当しました。校舎も新しく、オフィスビルほどの綺麗さで、優秀な学生さん達に研究室に入ってもらえ、楽しく仕事をさせていたいただいたものでした。やがて、学科の中で建築や環境デザインを学びたいという学生の割合が増え、環境デザイン分野を独立させようということになりました。当時、理工学部長をしておられた児島先生（土木工学科）が建築が大好きで学科設立を推進していただきました。科目構成や教員構成など、私と平尾先生、八木先生（三宅先生の後任、現在は関西学院大学教授）の三人で学科のおよその形を考えました。当初「環境デザイン学科」という名称で考えていましたが、前倒し人事で来られた及川先生の提案で「建築都市デザイン学科」とすることになりました。奇しくも私が立ち上げた事務所名の一部を英語にした名前になりました。建築と都市デザインは二分野を教育する学科という意味もありましたが、それより、建築が集合して都市を形成する、だから都市デザインとして建築を考えた方がよくないか、京町家の内部が市民に公開された最初であったと思います。かなり大きな反響がありました。

環境システム工学科では学科構成の三分の一を環境デザインにあてていました。先述の川崎清先生が学科設立に協力され、京大退職後、同学科教授に着任されました。三宅先生と平尾先生が相次いで着任され、一緒に環境デザイン分野を担当しました。校舎も新しく、オフィスビルほどの綺麗さで、優秀な学生さん達に研究室に入ってもらえ、楽しく仕事をさせていたいただいたものでした。やがて、学科の中で建築や環境デザインを学びたいという学生の割合が増え、環境デザイン分野を独立させようということになりました。当時、理工学部長をしておられた児島先生（土木工学科）が建築が大好きで学科設立を推進していただきました。科目構成や教員構成など、私と平尾先生、八木先生（三宅先生の後任、現在は関西学院大学教授）の三人で学科のおよその形を考えました。当初「環境デザイン学科」という名称で考えていましたが、前倒し人事で来られた及川先生の提案で「建築都市デザイン学科」とすることになりました。奇しくも私が立ち上げた事務所名の一部を英語にした名前になりました。建築と都市デザインは二分野を教育する学科という意味もありましたが、それより、建築が集合して都市を形成する、だから都市デザインとして建築を考えた方がよくないか、京町家の内部が市民に公開された最初であったと思います。かなり大きな反響がありました。

# 立命館に帰ってきました



環境システム  
工学科 講師  
石森洋行

思い返せば、京都大学で博士課程へ進むとき、親や知人に職につきかす一体何になるつもりかと問われ、立命館大学のような大学で働くことが出来ればと説明したことがありました。立命館には建築学科がなかったのにそう言ったのですが、縁あって、勤続中に建築都市デザイン学科創設に参加し、二十年にわたり働かせていただきました。夢は口に出すべし、と後輩に教えています。まだ数年、特任教授として教育に加えていただきます。お会いした皆様に感謝申し上げ、立命館大学と環境都市学系の今後のますますの発展をお祈り申し上げます。

本年度より環境システム工学科に着任しました石森洋行と申します。専門は、環境地盤工学であり、最近では廃棄物の適正処理・処分を中心に研究を進めています。廃コンクリートやスラグ等の副産物等の有効利用を進めるための環境安全性に関する基準や試験法を開発することや、また福島第一原発事故後に東日本各地で発生している放射性セシウム混じりの廃棄物処分に関する研究を行っています。実は、立命館大学出身です。私は一九九八年に理工学部・土木工学科（現在の都市システム工学科）に入学しまして、修士課程、博士課程と一貫して立命館大学で勉強させていただきました。その後ここ五年間は、独立行政法人国立環境研究所という研究機関で廃棄物処分に関する研究に従事し、このたび立命館大学に帰ってきました。ことができました。まわりは、私が学生時代のときの恩師ばかりです。

一度大学から離れて、外から立命館大学を眺めていると、いろいろな面が充実した素晴らしい大学だと気付かれます。研究に関しては国や地方の研究機関に引けをとらないほどの設備と研究資金、事務的支援が充実しています。教育に関して

一度大学から離れて、外から立命館大学を眺めていると、いろいろな面が充実した素晴らしい大学だと気付かれます。研究に関しては国や地方の研究機関に引けをとらないほどの設備と研究資金、事務的支援が充実しています。教育に関して



は、大学内には無線LANが備わり、ウェブ上で受講生の出席・講義資料・レポート提出・質疑等を一元管理できるシステムが構築されており、いつでも学生と教員は情報共有できるので、学生の理解度に応じて講義内容・方法を修正し、場合によっては個別対応できるといった工夫がなされています。すべての教室にはプロジェクタとスクリーンが備え付けられている等、教員のみならず学生にとっても気持ちよく過ごせる環境が整っていることが常々感じられます。

最も驚いたのは、ここ数年の、立命館大学で導入している「Project-Based Learning (課題解決型学習)」の効果です。環境システム工学科の三回生では「都市・地域マネジメント演習」という講義があり、約八十名の学生を五、六名程度のグループに分け、各グループでは担当教員から与えられたテーマに関して、学生はチームを組み、そのテーマから課題を抽出し解決に向けた取り組みを進め、最終的には一連の検討結果を発表します。具体的なテーマのひとつに、「実物大の橋のたわみを予測してください」という最終目標を与えていきます。実物と模型の関係を示す相似則の仮説をたて、実物を縮小した模型でのたわみの計測を行い、その結果から実物のたわみを推定するというアプローチ手段のみは教員から提示します。しかしそれ以降は、学生たちは自分たちがアイデアを出し合っており、どのような模型で実験するのか、相似則をどのように定式化するのかを、教員からのヒントを与えずに考えさせます。中には、われわれ教員でも考えもつかないアイデアや実験計画が示されるので、そういった行動を尊重し彼らの自信につなげられる教育ができればと考えております。この講義の予習・復習で学生たちが費やす時間は全員が百八十分/週以上であり、コメントには講義時間以外でも教員とのコミュニケーションをとりたいという声が多く、講義だけでなく、学生たちと接する機会を意識的につくらなければならぬことを感じます。

## 立命館大学技術士会の紹介

立命館大学技術士会は、平成21年(2009年)12月19日、建設部門の技術士を中心に設立されました。会の目的として、①会員相互の親睦、②大学の科学技術教育活動に協力し大学の発展に貢献、③会員の技術レベルの向上と会の発展、④技術士を目指す後輩への支援を掲げています。平成25年6月22日の第4回総会で、⑤として地域および社会活動への技術支援の志向が目的に加わりました。会員数は、現在130名ほどです。

現在の活動の主たるところは、後輩の技術士受験の支援です。これまでの活動経緯は、立命館大学技術士会のホームページ(HP)に掲載しております。HPは、<http://alumni.ritsumei.jp/gijutsusikai/> です。

第4回総会では人事が刷新され、会長には昭和50年(S50)土木工学科卒業の大森秀高が選出されました。また副会長に、S53卒の南側晃一、S58卒の土屋光弘、H15年院卒の橋口正悟を選び、技術士試験支援の強化を図りました。さらに会の活動の活性化のため、幹事の1/3以上を平成卒業者としました。

事務局への連絡はHPに掲載していますが、幹事長を務めるS47卒の糸田川廣志へとなっています。連絡先は、E-mail: 1) [hiro4823ito@yahoo.co.jp](mailto:hiro4823ito@yahoo.co.jp) 2) [pej-hiro5939@peach.plala.or.jp](mailto:pej-hiro5939@peach.plala.or.jp) です。



### ★技術士資格取得者は、当会へご連絡ください。(当会への入会は問いません。)

技術士のネットワークと後輩支援への情報としていきたいと考えております。

現在大学支援として、「JABEE制度と技術士制度の説明会」を都市システム工学科の授業等を活用して実施しています。今年度は環境システム工学科にも実施を企画しております。また、学生達を支援できるような技術講演会も、建設会と連携して実施したいと企画に動いております。

これらにご協力いただくためにも、技術士資格取得者の方々には、当会に技術士資格の情報をお知らせ願いたいと思います。よろしくごお願い申し上げます。

また、当技術士会の目的に賛同いただけ入会をご希望の方は、ご連絡をお待ちしております。みなさんと一緒に、技術者の社会貢献を微力ながら前進させたいと願っております。

平成25年(2013年)7月 立命館大学技術士会幹事会

## 環境都市系における20周年記念事業募金について皆様のご理解とご支援をお願いいたします。

歴史ある立命館の土木科・土木工学科は、現在、都市システム工学科・環境システム工学科・建築都市デザイン学科の、環境都市系3学科にまで発展してきました。そして2014年には土木工学科BKC移転20周年・環境システム工学科設置20周年・建築都市デザイン学科設置10周年の節目を迎えます。これを機会に、大学では建設系の新研究棟を建設し、これまで分散していた3学科の研究室を集約することになりました。

しかし、建物以外の設備や備品、教材などについては、通常の学費・研究費では、まだまだ不十分な財政基盤の状態です。老朽化したり旧式となった設備、実験機器の更新、海外で活躍することができる人材を育成するための新しいプログラム(びわこ国際人材育成)、また新棟を使ってグリーンビルディングの実験などをすすめて、これからの建設系の学生の教育や研究能力の向上を図ってゆきたく考えています。ぜひ、卒業生のみならず皆様のご支援をお願いする次第です。

なお、20周年記念事業募金に関する趣意書(及び募金専用払込票)を同封致しますので、そちらもご一読下さい。

## 事務局より

## お知らせ

### ■会員登録データ

立命館建設会会員の皆様の名簿を隔年発行しておりますが、そのもとになるデータベースは、皆様からのお申し出に応じて適宜更新しております。このデータベースは、年会報の送付、総会などの各種案内、また、各支部からの連絡、会費請求の事務などに利用しております。

今回送付いたしました年会報に同封されている「会員登録データ」文書上段に記載されているデータをご確認いただき、修正や変更がございましたら8月末日までに建設会事務局までご連絡下さい。

また、2012年12月発行の「平成24年度版会員名簿」は、会費を納入いただいている会員を対象に送付させていただきました。名簿ご希望の方は、同封の振込用紙にて2年分の会費(6,000円)を納入いただきますと、入金確認が出来次第名簿を送付させていただきます。

※なお、8月10日～18日まで、大学一斉休暇となります。何とぞご了承下さい。

### ■建設会年会費ご納入のお願い

立命館大学建設会は皆様の年会費で運営されています。

2013年度会費のご納入をお願い致します(年会費:3,000円)。

また、会費ご納入につきましては「郵便局の自動振替システム」をご利用いただくこともできます。申込み手続きは簡単ですので、すでに多数の会員の方にご利用いただき好評をいただいております。お申込みの際には、取扱郵便局「草津若草郵便局(TEL: 077-567-4050 FAX: 077-567-4120)」へ申込書の送付依頼書(様式適宜・住所氏名を記載)をFAXにてお送り下さい。毎年10月1日に会員様のゆうちょ銀行口座から年会費が自動引き落としされます(8月末以降のお申込みは、翌年10月1日からとなります)。詳細については、郵便局から送られてくる申込書に同封されます。

なお、銀行からのお振込も可能です(ゆうちょ銀行109(イチゼロキユウ)支店、当座0000884)。お振込の際、お手数ですが氏名の前に10桁のお問合せ番号をご記入いただくか、お名前・お問合せ番号・お振込日を下記アドレスまでご連絡下さい(振込手数料は申し訳ございませんが、ご負担願います)。

## 建設会事務局

〒525-8577 滋賀県草津市野路東1-1-1  
立命館大学理工学部環境都市系事務室内(担当:山元)  
TEL: 077-561-4911 FAX: 077-561-2667

<http://www.ritsumei.ac.jp/se/rv/ob.html>  
E-mail: [kenstkai@st.ritsumei.ac.jp](mailto:kenstkai@st.ritsumei.ac.jp)  
会費払込郵便振替口座: 02 大阪 01080-1-884